

言説分析を通じた北朝鮮経済政策把握の試み

日本国際問題研究所研究員 飯村友紀

はじめに

北朝鮮経済の分析においては、一般的に韓国側推計の統計資料や最高人民会議の予算報告などで発表される断片的な数値データを用いつつマクロ的な動態の把握を試みる手法が多用されるが、本稿では視点を変え、北朝鮮の公的文献を題材として、経済政策の傾向（いわば「流れ」）の背景に存する思考様式（政策的志向性）の描出を目指している。北朝鮮経済を概括しようとするときに一わけても公的文献を題材とする場合—観察者がしばしば直面する十年一日とでもいうべき報道傾向の硬直性と、その内実における変化の弁別という課題に、北朝鮮当局の志向性—根源的な（ゆえに容易に変化しない）問題意識と、その実現のために（時には）一定の柔軟性をともなうて表面化する施策の総体—に注目しつつ考察を行うことで対応を試みる点が、そこにおける眼目である。加えて、考察の過程で浮かび上がる北朝鮮経済の現状を推測させるミクロ的事例をここに並置することによって、斯様な志向性と実態との相関関係（志向性によって導かれた政策が実態に作用する一方で、当局の意図を超えて展開する事態を当局が自らの志向性に合致するものとして描こうとするとの構図）の一端を明らかにしたいと考える。

1. 2010年の流れ—概括

朝鮮労働党機関紙『労働新聞』の報道によって北朝鮮経済の動向を追おうとする場合、まずそこに見出されるのは明確なパターンをもって反復される「流れ」の存在であろう。すなわち、年頭の共同社説において重点課題や経済政策の方向性が概括的に示されると、直ちに主要な工場・企業所においてその貫徹を誓う「決起集会」が開催され、他の単位に向けてはそれらモデル単位の行動に範をとった増産競争（「社会主義競争」）が呼びかけられる。そして党中央委員会などの名義で発表される檄文（「共同口号^{スローガン}」）、あるいは対外関係の緊張（例えば米韓合同軍事演習の実施など）に関する軍の声明に呼応する形で増産が強調され、建国記念日（9月9日）と朝鮮労働党創建記念日（10月10日）と前後して大規模な建築工事の成果と年間計画の達成度が発表されることとなる。これを随時行われる新たなスローガンの創出や特定単位・模範的労働者をモデルとする増産運動、重要単位に対する金正日の視察（「現地指導」）が補強するとの構図が一つのパターンと化しているのであり、それを総括するのが冒頭に触れた最高人民会議（近年では通常 4

月頃に開催される)での前年度予算収支報告と今年度予算計画の発表ということになる。

このようなパターンは極言すれば数十年来続くものであり、本稿が考察する 2010 年においても、それをほぼ忠実に敷衍する形で報道が展開されたことは直ちに看取される。例えば、金策製鉄連合企業所での決起集会（1 月 10 日付）を嚆矢とする増産競争¹と同単位の奮闘ぶりを紹介する連載記事の掲載²、党創建 65 周年に際した共同スローガン（2 月 6 日付）³や米韓合同軍事演習「キー・リゾルブ」「フォール・イーグル」への強硬対応を宣言する人民軍最高司令部の声明（3 月 9 日付）⁴を受けて寄せられた各単位からの投書—増産をもって国力増強に貢献せんとの決意を表明するもの—に始まり、9 月の党代表者会を経て、年末にかけ一年間の経済的成果が羅列されるという⁵「流れ」が、そこに見出されるのである。また、新たなスローガンとしては「朝鮮は決心すればやる」との文言が登場しており、特に経済的成果と結合して多用されていることが確認可能である。⁶

なお、2009 年末に実施され、大きな経済的混乱を招来したと伝えられる貨幣交換（デノミネーション）について『労働新聞』上で言及がなされた例は確認できないが、この時期より金正日の現地指導に際して各単位の設備更新費用等の具体的な金額が（しばしば外貨額面で）公表されるケースが頻出している点は新奇な傾向であり、注目に値する⁷。少なくとも、北朝鮮における経済改革の試みとして注目された、いわゆる「7・1 措置」（2002 年）の際にも同紙が間接的な形で言及を行っていたことを想起するならば⁸、このような記事が何らかの動きと連動したものであった可能性は推測されよう。

ともあれ、『労働新聞』上にあらわれた「流れ」はかくのごときものであり、これが同時に 2010 年の北朝鮮経済の「外見上の輪郭」ということになる⁹。それでは、それらの「流れ」はいかなる志向性に導かれていたのか。以下において、マクロ・メゾ・ミクロの視点からその分析を試みることにしたい。

2. 産業関連の強調—敷衍される「先軍時代の経済建設路線」

まず、マクロの側面、すなわち全体的な経済構造に関して目を引くのは、重工業・軽工業・農業の各部門の関係性をあらためて闡明にするスタンスである。これ自体は 2010 年の特徴をなすものとは言いがたいが、概念整理のためにその論理展開を辿るならば、それは以下のごときものであった。

第一に、「四大先行部門は人民経済の機関車」との文言が示すごとく¹⁰、金属工業・電力工業・石炭工業・鉄道輸送の基幹産業としての重要性が反復されることとなる。これはかねてより「北方の鉄山峰（咸鏡北道茂山郡：筆者註。以下カッコ内同じ）が元日早朝に 15 万トン大発破で総進

軍のこだまを轟かせ、咸鏡南道端川市)と順川地区(平安南道順川市)の切り羽ごとに新たな奇跡創造の発破を深く地核に響かせている。北倉(平安南道北倉郡)と平壤の火力タービンが氣勢に満ちた唸りでそれに応え、二本の軌道の上に電気機関車が増送闘争の汽笛を高く響かせる」といった表現で示されていたものであるが¹¹、斯様な認識より、基幹部門の発展があつてこそ、その他の部門(なかんずく軽工業部門)の増産も実現するとの言説が導かれる。これが第二の段階である。

「わが国の軽工業工場を分野別に一度見てみよう。紡績工場から続々と流れ出す布地に始まり、歯ブラシ、歯磨き、塩、醤油のような細々した商品と基礎食品に至るまで、あらゆるものをみな国内で十分に生産しうる完備された構造を備え、のみならずそれがわれわれの原料、われわれの資源に依拠していることによって、安定した生産性と確固たる展望を持っている。機械工業のCNC化が実現し、われわれの強力な重工業の確かな裏打ちを伴っているがゆえに、軽工業の土台は今日だけでなく明日も、永遠にびくともしない。(中略)いまや自負することができ。いかなる政治波動・経済波動が世界を覆い、またいかなる封鎖と制裁が加えられようと、わが人民の食べ、着て、使う生活上の問題においては微動だにしないとの考えでわれわれの心は固められ、信念は百倍となる」¹²

「われらが暮らす住居は美男子アパート7号棟だといえるような社会主義仙境通り、われらの故郷は強盛大国の圃田が一目に見渡せるアンズの郷だといえるような社会主義仙境マウルに暮らす誇り、大同江タイルが輝く食堂で三日浦特産物工場で作った朝鮮の特産物を食卓に載せ、互いに勧め合う喜び、寧辺の絹織り乙女たちの手になる布で服を編み、われらの『春の香気』化粧品をつけて大同江果樹総合農場で収穫した芳しい果物の籠を下げて商店を出るといった楽しい心、創造の宝が等しく分け与えられ、集団主義美風の中で微笑みの花が咲く浪漫的生活」¹³といった理念型で描かれる「人民生活の向上」も、最終的にはこのような経済連関の結果(第三段階)として現出する、との論理展開がなされるのである。斯様な経済発展の方法論が、北朝鮮の経済政策をめぐる言説には通底している。

ならば、新年の共同社説で「人民生活の向上」を重要課題として強調する一方で、それが民生部門への直接的な投資ではなく、「四大先行部門」への集中投資によって実現するとの迂遠な方針を強弁する意図は奈辺にあるのか。言説からは、そこに「国防工業」すなわち軍需産業への重点投資が全般的な経済浮揚をもたらすと説きつつ、その優先発展を唱える「先軍時代の経済建設路線」が内在していたことが看取される。北朝鮮当局の文脈においては、あくまで軍需産業と、そこへの資源・エネルギー供給の根幹となる「四大先行部門」への投資を所与の条件に措定した上で、民生部門の浮揚が行わなければならないのであつたのである¹⁴。近年盛んに行われている軍事部門

の単位が生産活動に関与する事例の顕彰も、その反映、すなわち「国防工業」が民生に好影響を及ぼすとの論理を裏付けんとする点にその目的が存していたものと考えられよう¹⁵。

「自立的重工業の核心である国防工業を最先端技術で装備された 21 世紀の威力ある国防工業へと強化発展させ、現代化された経済を建設・発展させていく上で引き続き主導的役割を果たすようにしなければならない」¹⁶

「人民軍隊では敬愛する将軍さまの革命的領軍体系をさらに徹底して立て、政治軍事訓練を力強く繰り広げて白頭山革命強軍の強大無比の威力を力強く轟かせねばならない。先軍時代の経済建設路線を強盛大国建設の経済路線として確固として掴み、国防工業に必要なものを最優先で保障してやらねばならない」¹⁷

そして、斯様な構造（軍需産業へ投資を集中させつつ、「人民生活の向上」を重点課題に掲げるとの構図）からは、北朝鮮当局の問題意識が「経済システム維持への固執」すなわち軍需産業優先の経済構造は変化させず、あくまで電力や原料のインプットの増加によって増産を目指す企図と、「生活水準の低下が招来する体制の安定性への懸念」に大別されていること、そして両者をいかに自らのロジックの中に整合させるかが一つの課題となっていることが分かる。

「電気の問題が解かれてこそ、石炭、鉄と機械、肥料と米も生じ、鉄道輸送の問題も解決される。試練の中で固められてきた主体工業の巨大な潜在力を発揮して人民の絢爛たる理想を全面的に実現するには、電力工業を飛躍的に押し立てねばならないのであり、そのためにわれらが将軍さまは強行軍を果敢に続けられているのだ」¹⁸

「計画化事業をよく行う上で、工場・企業所の間で契約に従って資材供給事業をよく行えるように計画を立てることは非常に重要な問題として現れる。偉大な首領さまが労作の中で強調されたように、計画はどこまでも工場・企業所の生産能力に合わせて、現実的可能性をよく打算して立てねばならない。特に電力工業・石炭工業・鉄道運輸を先立たせることに投資を集中できるように計画を立ててこそ、一次・二次加工品の生産を決定的に先立たせて原料・資材を工場・企業所間に結んだ契約にそって供給することができ、人民経済のすべての部門で原料・資材の心配をすることなく生産を正常化していくことができる」¹⁹

「人民消費品生産で一大革新を成し遂げてこそ、軽工業発展と人民生活向上のためのわが党の領導業績がさらに輝き、大高潮進軍に馳せ参じた人民たちの精神力を最大限に噴出させることができる。加えて、帝国主義者たちとあらゆる敵の制裁封鎖策動が露骨に敢行されている今日、軽工業革命の炎を強く熾すことは歴史の反動どもに無慈悲な鉄槌を下し、ウリ式社会主義の優越性をさらに高く発揚するための重要な闘争となる」²⁰

このように、近年の北朝鮮経済政策は、軍需産業と民生の同時振興という課題への対処を図る

点に、その根本的な問題意識が存していたのである。

3. システム変更なき経済浮揚の方途—「プラグマティック」な思考転換？

(1) 潤滑油としてのCNCと「国防工業」からのフィードバック

では、斯様な政策的志向性と問題意識はいかなる手法をもって実現・解決されるのか。上にも一部見た「投入すべきインプットの増加」との対処法は恒常的に強調されるものであるが、近年においては、それに加えて科学技術による効率化が主要なトピックに位置付けられ、特にその技術が軍需産業に由来するものであることを強調することによって「先軍時代の経済建設路線」の妥当性を裏付けんとする傾向が顕著に現れていた。具体的には、経済構造と経済運営システムの根本的な変更ををともなわずにその全般的な効率化を可能とする科学技術を一種の「潤滑油」として描写する記述がたびたび登場し、以下のごとき言説の形をとって展開されたのである。

「先端科学技術を発展させることは何よりもわれわれの経済の主体性・自立性をすべての面で強化するための根本的要求である。経済強国の重要な徴標は主体性と自立性であり、経済的自立は技術的自立によって担保される。技術的隷属は経済的隷属を生む。自らの科学技術に依拠してこそ経済の自立性を確固として保障することができ、いかなる世界的な経済波動にも動じずに経済建設を力強く促していくことができる。経済の自立性は、自らの原料・燃料・動力資源に依拠して多面的・総合的な経済部門構造を備え、経済を発展させていくことで表現される。(中略) 多面的で総合的な経済部門構造を備える上で先端科学技術の役割は非常に高まっている。先端科学技術によって先進的な生産工程が補充され、新たな経済部門が出現して経済部門構造がさらに更新・完備されることが今日の経済発展の趨勢となっている」²¹

その具体例としてはCNC(コンピュータ数値制御)技術がとりわけ強調され、『『CNC』という言葉が大高潮時代の象徴語となり、先端突破が全人民の理想、闘争気風となっているのが、まさに今日の祖国の雄大な現実なのである』と²²、先進的科学技術の代名詞として、CNCの語は様々な局面で比喩的にも用いられるに及んでいる。現時点では、経済記事におけるCNCは具体的にはコンピュータによる生産ラインの集中管理と複数の機械の同時制御、あるいはコンピュータ制御による精密工作機械などを指すものとして用いられる例が大半であるが、CNC工作機械の国産化に成功したとされる模範単位「蓮河機械」の活動が大きく報じられ、「生産に直結する科学技術的成果の普及」を印象付けんとする試みが続けられた点は、従来の報道においては見られなかった新奇な傾向であった²³。そして、このCNC技術が軍需産業ときわめて密接な関連を有することもすでに公言されており、このことから、今後は「国防工業」に由来する科学技術が民間部門に波及していることを「実証」する典型例としてCNCが位置付けられ、軍需産業への優先投資の妥当性を

補強する題材として用いられるであろうことが予想されるのである。

「先端突破の威力で大高潮の伝統を輝かしく継承していく上では国防工業部門が先頭に立っている。CNC 化が高い水準で実現されたわれわれの国防工業はわれわれの経済を世界最先端に向かって力強く前進させる跳躍台となっている。すべての部門、すべての単位では自らを国防工業部門の最先端水準に追いつかせるために猛烈な追撃戦を繰り広げなくてはならない。国防工業部門のイルクンと科学者・技術者、労働階級のようにみなが最先端突破の栄誉を帯びねばならない」²⁴

むろん、それが「首領さまと敬愛する將軍さまの賢明な領導により、わが国ではCNC技術を開発するための事業がすでに久しい以前に開始されており、近年に至り急速に発展して非常に高い段階に入った」との記述のごとく明確な展望と計画に基づいて推進されてきたとは考え難く²⁵、また科学技術重視政策全般においても、以下に示すように制度的不備や指導体系の混乱が克服すべき課題として挙げられる状況から、その実態はある程度推測されようが、斯様な政策的志向性と報道傾向が持続すること自体は、けだし確かといえそうである。

「情報産業時代である今日、科学技術はすなわち生産、生産はすなわち科学技術ということが出来る。(中略)では、科学技術と生産を密接に結合させていく上であらわれる重要な要求とは何か。それは何よりも科学技術と経済を統一的に指導管理する事業体系を立てることである。科学技術と経済を統一的に指導管理する事業体系を立てることは、科学研究機関と经济管理機関の間、科学技術と生産の間の連係と結合を強化するために欠くべからざる問題である。内閣と省、中央機関から工場・企業所に至るまで、科学技術と経済を統一的に指導管理する整然たる事業体系を立ててこそ、国の科学技術力量を国家的利益に合わせて組織動員することができ、人民経済の現代化で提起される科学技術的問題を機動性をもって解決することができる。そのためには科学技術研究事業と経済指導管理事業を密接に結合できるよう、正しい機構体系と管理方法を確立し、それを現実発展の要求に合わせてたえず改善していかねばならない。そうしてこそ、現実的に必要な科学技術的問題を選定して研究完成することにはじまり、それを生産に受け入れて恩恵を発揮するようにすることに至るまで、提起されるすべての事業を統一的に掴み、力強く推し進めることができる」²⁶

(2) 「現代(的)科学技術に基づく自力更生」概念

そして、このような傾向と照応するかのごとく、その背後においてより根源的な姿勢の変化が生じていた。「世界的な先端技術を積極的に取り入れ、われわれの経済の技術装備水準をさらに高い段階へと引き上げるとき、経済強国建設の雄大な目標を成功裏に達成することができる」との

認識のもとに²⁷、従来は公的文献上で事実上禁忌視されてきた外国からの技術導入が公言されるに至っていたのである。特に「現代的科学技術に基づいて自力更生する上で重要なことは、現代的科学技術の成果を自らの実情に合わせて生産に積極的に取り入れることである。(中略)自らの力と知恵で成し遂げた科学技術成果のみならず、他国の先進科学技術を自らの実情に合わせて受け入れねばならない。そうしてこそ、工場・企業所の技術改建を実現する問題も、経済事業において最大限の実利を保障する問題も円満に解決することができる」と、斯様なスタンスが独特の「自力更生」概念と関連付けて語られ、「現代(的)科学技術に基づく自力更生」の名称が冠されて、外国からの製品・技術の導入が「自力更生」と撞着しないことが改めて強調された点はその大きな特徴であり²⁸、上述の報道傾向と合わせて、科学技術重視の姿勢をより強く印象付ける結果となったのである。

もとより、それは自らの劣勢認識を反映したものであり、この点は公的文献の記述にもある程度率直に表出されていた。EU各国との経済交流の拡大を説きつつ、その利点として、輸出市場の獲得よりは先進科学技術受容の側面を強調した次の言説はその一例といえよう。

「また、ヨーロッパ同盟との貿易を拡大発展させることが対外市場の拡大の重要な槓杆となるのは、ヨーロッパ同盟市場における先端技術製品の構成が多様で、比重が相対的に高いことと関連する。(中略)ヨーロッパの国々との貿易関係を拡大発展させれば、人民経済の技術改建と現代化、情報化を促す上で少なからぬ手助けを得ることができる。(中略)ヨーロッパ同盟との貿易関係をさらに拡大発展させれば、現時期の人民経済を活性化・発展させるのに必要な現代科学技術と最先端技術を受け入れ、人民経済技術改建に貢献することができる。(中略)経済強国建設と人民生活向上のための膨大な家業と目標を最短期間で達成するためには、各種の技術交流を通じて他国の進んだ科学技術を受け入れねばならない。これは科学技術の速い速度によって人民経済の全部門を現代化・情報化し、他国から遅れをとることなく科学技術の世界的な発展趨勢に歩みを合わせていく重要な担保となる。それは、他国の進んだ科学技術を受け入れることは決して国の科学技術を主体的に発展させることについての党の要求に背馳するものではなく、また投資と時間を節約しつつ科学技術の発展と高い生産成長を実現させる重要な条件となるためである」²⁹

ともあれ、このような認識に裏打ちされつつ、『労働新聞』上では外国製品を利用する事例が多数紹介されることとなる。特にその多くは写真上で明示され、従来からの姿勢転換を視覚的にも「裏付け」たのであった。その一例を挙げれば次の通りである。

<付：『労働新聞』上における外国製品の登場例>

- ・中国製「玻璃清洗机 ZJ-1500」（「偉大な領導者金正日同志におかれては大安親善ガラス工場に新たに建設された強質ガラス職場と江西薬水加工工場を現地指導された」『労働新聞』2010年11月25日付）
- ・中国・TCL 集団製エアコン（「朝鮮人民軍最高司令官金正日同志におかれては朝鮮人民軍創建78周年に際して朝鮮人民軍第586軍部隊の指揮部を訪問され、人民軍将兵たちを祝賀なされた」『労働新聞』2010年4月26日付）
- ・日本・トヨタ製ワゴン車を中央郵便出版物逓送局で集荷・配送車として使用（「遅滞なく、迅速・正確に」『労働新聞』2009年1月2日付）
- ・米国・hp 社製液晶ディスプレイ（「偉大な領導者金正日同志におかれては金日成総合大学に新たに建設された電子図書館を現地指導された」『労働新聞』2010年4月13日付）
- ・米国・DELL 社製液晶ディスプレイ（「偉大な領導者金正日同志におかれては現代化の模範鉦山である3月5日青年鉦山を現地指導なされた」『労働新聞』2010年9月12日付）
- ・中国・KONKA（康佳集団）製液晶ディスプレイ（「偉大な首領金正日同志におかれては立派に技術改建された平壤穀産工場を現地指導なされた」『労働新聞』2010年8月26日付）
- ・日本・倉敷機械製工作機械「KBT-1103」（「偉大な領導者金正日同志におかれては金策製鉄連合企業所と羅南炭鉦機械連合企業所を現地指導された」『労働新聞』2010年12月7日付）
- ・中国・青島豊業自動化設備有限公司製包装機械（「偉大な領導者金正日同志におかれては見事に改建拡張された平壤小麦粉加工工場と船興食料工場、香満楼大衆食堂を現地指導された」『労働新聞』2010年12月12日付）

このように、外国の科学技術に対する姿勢の転換は、何よりも視覚的な側面において強調されることとなったが、それらをより詳細に検討するならば、このとき北朝鮮においてさらに興味深い様相が現出していたことが分かる。まず、外国製品・技術の導入をあたかも「奨励」するかのとき上述の傾向にもかかわらず、独自技術・独自開発を唱える言説はむしろ強化され、鉄鋼、化学肥料、人造繊維などの国産化が相次いで発表されていた³⁰。「現代（的）科学技術に基づく自力更生」の概念自体のニュアンスがそれまでにもたびたび変化してきた点を考慮すれば、外国製品・技術の導入の公言に対して北朝鮮当局がなお逡巡を抱いていたとの事情が、その背景には存していたものと考えられる³¹。

そして、斯様な状況は現実の「自力更生」のあり方にも影響を及ぼしていた。例えば「今年、われわれ軽工業省では一つの生産工程を現代化する際にも情報産業時代の要求に合わせて最上の

質的水準で行うことに先次的な関心を払った。そこでわれわれが掴んだ重要な環は、最先端科学技術を受け入れるといっても他人のものをそのまま真似ようとするのではなく、われわれの実情に合ったウリ式の現代化を実現するようにした点であった。(中略)偉大な將軍さまが高く評価してくださった平壤穀産工場のケースのみを見ても、現代的な糖菓類生産工程のCNC化は徹頭徹尾われわれの設計、われわれの技術で、われわれの実情に合わせて実現した現代化の誇らしい結実と胸を張って言うことができる³²との記述がなされた単位において、実際には外国製品が使用されていることが明示されるなど、一種矛盾した状況が現出していたのである³³。このことから、外国製品・機械を直接的に利用することまでもが「自力更生」に包摂され、それらを用いてCNC化を行う(この事例では生産ラインの中央制御とオートメーション化)場合、それが「自国の技術・自国の力で」CNC化を実現したに等しいものと文献上で解釈されるに至ったことが看取される。そこにある意味でのプラグマティックな思考転換、すなわち国産開発への固執から経済効率の逡減を招来する「自力更生」の実質的な放棄への流れを推測することも、あるいは可能であろう。ただし、斯様な「自力更生」が単純に「構成要素として外国製品を用いつつ、総体としての自力解決・国産化を実現する」といった範疇を大きく超越したものであることもまた直ちに見出されるところであり、例えば国産開発の成功が喧伝されるCNC工作機械に対しても、かくのごとき「自力更生」は適用されていた³⁴。今後はそれらが次第に「純粋な国産品」に置換されていく様子が報道写真等を通じて「視覚的」に示されるものと予想されるが、斯様な「自力更生」の様態、そして外国製工作機械の商標を削除した報道写真がすでに文献上に登場している状況を考慮すれば、そのような「国産化」の実態はより慎重に分析する必要がある³⁵。そして「現代(的)科学技術に基づく自力更生」が、単に外国製品の氾濫を糊塗するプロパガンダにとどまるのか、あるいは他国からの技術移転を円滑にして独自の技術開発を充進させる方向に作用するのかもまた、現状では不明瞭なままといわざるを得ないのである。

(3) 拡大する裁量権をめぐる

さらに付言するならば、このような「現代(的)科学技術に基づく自力更生」概念は、その登場自体、各経済単位の裁量権の拡大を暗示するものであった。すなわち、当局が外国製品の氾濫という現状を弥縫するためにそれを打ち出していたにせよ、あるいは実際に外国技術・製品の導入を促進する意図を有していたにせよ、それを担う各単位の自律的行動の拡大はその前提、もしくは必須条件であったのである。この点を裏付けるかのごとく、各単位の裁量権拡大はより直接的な筆致で表現されるに至っていた。例えば、「鉱山の天地開闢は、十重二十重、多方面的に変事が起きているわが祖国の縮図ともいえる。生産正常化の軌道を疾駆しつつ生産能力拡張工事を

う中でも千数百 m の鴨緑江防水堤防工事を 8 ヶ月で終えたとはにわかには信じがたい。飛躍の炎の中で自体発電所が力強く回り始め、生産正常化の突破口となる大容量変電所が瞬く間に建設された事実には驚かずにいられようか。数十里の循環道が新たに形成され、鉱山の顔をさらに明るく、整ったものになっている。鉱山の人々の笑い声に満ちた生活の中に漂う『婚約さえすれば立派な住居が現れる』という気分のよい言葉とともに、数百世帯の文化住宅がさらにそびえたつ³⁶との表現で顕彰される模範的単位の場合、当地の支配人が「採取工業発展の世界的趨勢と連関部門の発展動向、該当国の経済戦略と経済発展方向、世界市場における価格変動と国際情勢まで研究する」探求力に裏打ちされた「巧みな外交術で辺疆貿易を通じ多くの利益を得ていること」までもが称揚されており、このことから、「国家に手を差し出すことなく、技術革新を行って造成した余裕資金で保障した」とされるその住宅建設や生産設備の更新が、実際には鉱石の輸出による利益から支出された可能性が高いことが示唆される³⁷。そして金正日がそのような裁量権を活用して成果を上げた単位を現地指導することで「お墨付き」を与える状況が、今や現出しているのである³⁸。自力調達によって成果を上げることが模範的行動とされ、なおかつ自力調達の範疇が限りなく拡大している様は、直接生産に従事しないはずの単位が独自の経済活動を行う例、あるいは行政区分を越えて「生産基地」を運用する例などからも看取され、これらは北朝鮮経済の「自由化」—換言すれば統制の弛緩—の程度を推測する上でも興味深い³⁹。ただし、斯様な状態があくまで指導者の恩寵によってもたらされた一種の「特例」として描かれている点には注意が必要であろう。そのような記述は、直接的には、字義通りの計画経済の実行が極めて困難となり、また伸張する非公認経済がいまや統制の及ばない存在となりつつある現状を糊塗することを目的としたものと推測されるが、それでも、斯様な行動に対して「正式な合法化」がなされず、あくまで「黙認」ないし「特例としての承認」が行われるにとどまる状況は、それ自体、各単位の自律的な経済活動を緊張感を内包したものとし、結果的に各単位をして長期的な研究開発と技術革新・市場開拓よりは短期的・即時的利益を優先する活動へと向かわしめる可能性が推測されるためである⁴⁰。また、この点は先に挙げた科学技術重視政策、特に「現代（的）科学技術に基づく自力更生」の行方にも影響を及ぼすこととなろう。

4. メゾとミクロの側面に見るその内実

そして、ここからさらに視線を「下方」に転じていくと、北朝鮮経済のより根源的な問題点が明確な形をとって浮上することとなる。それらはいかなれば、上に見た北朝鮮当局の政策的志向性と民衆レベルでの思考・行動様式が混淆するメゾないしミクロの領域の様態ということになるが、ここでは『労働新聞』記事の引用を列記することによってその一端を示しつつ、分類を行

うこととしたい。冒頭に示した記述のパターンに即して、2010年にも多くの単位が生産計画を超過遂行、前倒し達成したことが報道されたが、それらを瞥見するだけでも、本来は併記されて然るべき「指標別計画」と「生産額計画」が恣意的に記述されることは明確に看取され、また「年頭（指標別）→秋頃（生産額計画）→年末（指標別）」と、時期的にその記述の重点が変化していることも明白である⁴¹。これらの点からは北朝鮮において、いわゆる現存社会主義に典型的な現象、すなわち各単位が高額な製品の生産を優先することで生産額計画を達成し、それをもってノルマ遂行を図る傾向がなお根強いこと、さらには党代表者会・建国記念日・党創建記念日などが集中する9月～10月の時期を目標とする増産キャンペーンに対し、各単位が高額な製品の生産によって対応しようとする傾向が依然強いことが推測される。そこで示される数値の信憑性についてはひとまず措くとしても、斯様な傾向それ自体が、生産活動の不安定化と総体としての計画経済の蹉跌を惹起する蓋然性の高いものであることは容易に推測されよう。その意味で、北朝鮮経済が「潤滑油」としての科学技術の積極的導入によって着実に生産を増大させつつあるとの「像」は、その実きわめて脆弱なものといえようが、それ以上に、ここに示す諸点はより根本的な構造上の問題点として作用していたものと考えられるのである。

(1) 思考の硬直性：

「8月3日人民消費品の子供服を生産する戦闘に工場が沸き立っていたときのことである。ある日、イルクンたちは懸案となっている問題を解決するために集まっていた。協議が始まると、初級党秘書崔ジョンスク同務が服の号数を増やすことを提起した。『服の号数まで？』誰もが驚きを禁じえなかった。生産も緊張しているなか、各指標に加えて服の号数まで増やそうというのであるから、それも無理からぬことであつた。イルクンたちの心中を察した初級党イルクンは、自分が目撃した一つの事実を聞かせてやった。数日前、初級党秘書はある百貨店を訪れていた。多くの仕事を抱える彼女がすべてを後回しにして百貨店で時間を過ごしたのは目的あつてのことであつた。生産したばかりの商品に対する人々の需要を調べようとしていたのである。工場で作った子供服に対する人々の評価は比較的良好であつた。ところが、その中で子供を連れたある母親だけは残念な表情を浮かべるのである。そのわけを尋ねると、娘に着せようと思ったのだが、服がもう少し大きければよかつたのに、とのことであつた。確認したところ、彼女が求める号数の服がなかつたのである。服を求めているのが自分自身であつたらと考えてみよ一。初級党イルクンの話は長いものではなかつたが、イルクンたちに大きな余韻を与えた。納得とともに自責の念を残したのである。（中略）『今回の件を通じていっそう切実に悟りました。われわれイルクンたちにとって思考と実践の基準はただひとつ、人民の利益なのだ

ということを…』生産の一面にのみとらわれて需要者たちの心情を蔑ろにしてきた一部のイルクンたちの自責の声であった」⁴²

(2) 熱意の不足：

「過去の経験を分析したとき、イルクンたちはある事実を目を向けた。それは収穫と脱穀の初期には実績が上がり、後に成績が落ちる作業班があるという事実であった。イルクンたちが調べてみると、これらは、概して（担当する：筆者註）田畑が互いに密接しておらず、脱穀場から圃田までの距離が遠い農場の作業班であった。最初は脱穀場に近い圃田の稲束を運んで脱穀するために実績が上がるものの、終盤に至って圃田までの距離が長くなると、運搬の条件が不利になり、実績が落ちていたのである。方途はないものか。イルクンたちはあわただしく駆け回った。収穫が始まったある日のこと、孟中協同農場に赴いた郡協同農場経営委員会の責任イルクンは脱穀場周辺に所狭しと並ぶ稲塚を目の当たりにすることとなった。聞いてみると、この農場では稲が実ると直ちに、それぞれの圃田や距離が遠い圃田の稲をまず刈り取って脱穀場の近くに運び、稲塚を作るようにしていた。このようにすれば労力と運搬手段を合理的に利用し、稲束の運搬を先立たせているために脱穀が本格的に行われる時期にトラクターにかかる負担を減らすことができた。合理的な作業方法であった」⁴³

(3) 制度的不備：

「品質管理と監督事業を限りなく改善強化していかなければならない。製品の生産過程はすなわち品質管理事業の過程である。製品を徹底的に規格化・標準化し、それに基づいて技術的に生産するように要求性を高めてこそ、消費品の質を保障することができ、国家的にも大きな利得を得ることができる。経済指導機関では製品の規格化・標準化が質的向上の第一工程である点を肝に銘じ、すべての製品に国規を正しく定めねばならない。新たな製品が登場したときにも国規を定めてやり、国家的に規格を統一させねばならない。工場・企業所で製品の規格化・標準化を疎かにして技術工程と標準操作法の要求に背き、代用資材を使う現象が生じないようにしなければならない。品質監督イルクンたちは工程検査と製品検査を責任をもって厳格に行い、消費品の質が徹底的に保障されるようにしなければならない」⁴⁴

(4) エネルギー不足：

『電気の問題もわれわれの力で解かなければなりません。』驚きを禁じえないイルクンたちに向かって、彼（作業所支配人：筆者註）は（中略）自動車も代用燃料で走るのだから、その

動力によっていくらでも電気を生産できるという案を出し、技術者の協議会を上程した。この発起は彼らの全面的な支持を得た。技術者たちが主人となって奮発してかかるや、議論の焦点として挙げられていた原料の問題も解決された。トウモロコシの産地である郡で容易に手に入るトウモロコシの芯を利用すれば、原価を低く抑えながら多くの原料をたやすく確保できたのである。(中略) 廃棄された自動車機関を利用してガス発生装置を作る計画に沿って、設計員金ジョンファン同務が設計を完成させ、次いで集体的知恵が合わせられた。その結果、短い期間にガス発生装置が完成するという革新が創造された。自力更生が第一であり、自分の力を信じて取り組む集団の力が第一である。全員がこの信念にあふれて取り組んだ結果、あれほど困難に思えた発動発電機を作って電気を生産することに成功した。その後、電気を生産・利用する過程でイルクンたちは一つの問題に直面した。それは実利を保障する問題であった。トウモロコシの芯を利用する方法は周辺に原料が多く有利であったが、そのかわりにガス発生装置の修理・整備に少なからぬ手間をかけねばならなかった。イルクンたちはこの問題を重く考え、技術者たちと協議する中で石炭を原料に利用するという合意に達した。毎年自体炭鉱で生産保障される石炭の中から少量を利用するだけでも十分であったし、豆炭成型機も持っていた。作業所ではこれに合わせてガス発生装置を作り直し、電気を生産した。この電気によって、溶接作業を行いつつ必要な一・二台の設備を動かすことができた。(中略) 代用燃料を利用できるように自動車を改造する問題が提起されたときのことである。実利を確認しつつ思索する中で、イルクンたちは自動車に代用燃料を使う発動発電機を設置して、移動修理車として利用すれば経済的効果が非常に高いとの案を示した。このようにすれば、自動車で荷を運びつつ、圃田で溶接をはじめとする作業を、発動発電機を使って必要なときに現地で電気を生産して行うことができた。こうして、作業所では任意の場所で電気を生産できる代用燃料による発動発電機を作り出すことに成功した。それは大きな恩恵を發揮した」⁴⁵

(5) 物資供給の内実

「以前、ある炭鉱機械工場に必要な資材を保障して戻ってきた所長崔フンボム同務の心は重かった。自分たちが受け持った資材ではなかったが、採炭設備の製作に必要なある資材（の不足：筆者註）のために苦労している当地のイルクンたちの姿が忘れられなかったのである。彼は従業員たちに語りかけた。『もちろんこれは私たちに与えられた課業ではありません。しかし、この資材も私たちが受け持とうではありませんか。』（中略）苦難の時期に所長としての事業を開始した崔フンボム同務であったが、その時期には鉄板をはじめとする資材を受け取ってくるのも難しく、また該当単位で求める資材を供給することも困難な状況であった。しかし、彼は

上で資材を保障してくれるのを座して待つことはなかった。彼は供給所を整えるとともに、従業員たちと北部地区の工場・企業所を回りつつ採炭設備・鉱山設備の製作に必要な資材を収集・保障した。そして直ちに要求される資材ではなくとも、採炭設備の製作に利用できると思ったものは必ず手帳に記すようにした。ある炭鉱機械工場に数十台の炭車を生産できるだけの基本資材を保障する課業が滞ったときのことである。その手帳を広げ、夜を徹して具体的な作戦を練った彼は、翌日従業員たちとともに貨物自動車に乗り込んだ。そして職場を発った彼は手帳に記された単位に出向き、各種の資材と付属品を集めて、ついには数十台の炭車を作れるだけの資材を炭鉱機械工場に送ったのである。このときばかりではなかった。数年前に炭鉱で巻揚設備が不足し、石炭生産に支障が生じていることを知った彼は、またも手帳を開いて一枚一枚ページを繰り、はたとひざを打った。故障して使えなくなった二台の巻揚設備が北部地区のある場所に存在することが、彼の手帳には記してあったのである。彼は従業員たちとともに数百里離れたその場所へと向かった。しかしそのイルクンたちは、一台が数十トンにもなるそれを自力で活用するのは難しいのではないかと彼を引き止めた。彼に同行した従業員たちも、5・6名の人員でどうやってそれを運べるのかと、引き返すことを勧めた。そのとき、彼は資材保障事業は生産も同じと語り、その晩から焚き火を燃やして戦闘にとりかかった。しばし後、彼は一つ一つ分解して（貨物自動車に：筆者註）積んだその設備を、現状復旧させて炭鉱に送り届けたのである。数年前に大波によって破損したはしけが波にさらわれて漂着したときにも、彼は該当単位との連携の下、だれもが思いつきもしなかったはしけ解体戦闘を組織し、鉄板を回収して炭鉱機械工場に送ってやった。今までに供給所から採炭機械・鉱山機械工場に送った多くの鉄板と数千台の設備を作れるだけの資材、漁郎川発電所建設場と白頭山先軍青年発電所建設場に送った百数十台の炭車には、資材イルクンとしての崔フンボム同務の高い責任性と愛国献身の汗が熱く染みついている。『党細胞秘書同務、採炭設備製作に必要な資材は必ずや解決してみせます』この言葉を残して、従業員たちとともに出発した所長は、はたして数日後、採炭機械工場が切望していたその資材を届けて戻ってきたのであった」⁴⁶

(6) 民衆レベルでの行動一略と栄達

「彼女が職場に通う身でありながら豚と鶏、ウサギを飼い始めたのはもう10年も前のことである。その間、チョン・チュンファ同務が飼育した数十頭の豚と多くの鶏、ウサギを家庭での暮らしで用いていけば、少なからず家計の助けになったかもしれない。しかし、チョン・チュンファ同務は苦勞して育てたそのすべてを、常に人民軍軍人と市内の特類榮譽軍人、戦争老兵たちに送ってやった。畜産の専門家でもなく、その上職場での仕事でいつも多忙な彼女がわず

かな空き時間と休日を利用してこのような事業をしなかったとて、それを責める者はいない。数頭の種豚と鶏、ウサギの飼料の問題だけをとっても、その解決がいかに困難であったことか、時にはすっかり気落ちしてへたり込みたくなることもあったと、彼女は率直に語った。しかし、そのたびにどこからか聞こえてくる歌声が彼女に力を与えたのだという。革命の軍服を着て舞台の上で歌う長女の声。幾たびも敬愛する将軍さまをお迎えして公演するという幸福と栄光の絶頂を極めた娘の歌声が脳裏に浮かぶたびに湧き上がる力と勇気。ありがたい祖国がなく、貴重な社会主義制度がなかったならば、平凡な労働者の娘がどうしてかくも華麗な舞台で心のかぎり歌を歌い、才能を花咲かせることができたであろう。柔術に並外れたセンスを持つ次女の才能を父母よりも先に見出し、首都の大学で存分にそれを花咲かせてくれた祖国のありがたみも、チョン・チュンファ同務は片時も忘れたことがない」⁴⁷

むすびにかえて—理念と弥縫の^{アマルガム}凝固物

以上、本稿では『労働新聞』を主たる題材としつつ、2010年の北朝鮮経済の回顧を試みた。その梗概は以下の通りである。

まず、新聞記事の言説から浮かび上がるのは、軍需産業へのあらゆるリソースの優先的投入を掲げる「先軍時代の経済建設路線」を所与のものとしつつ、その枠内で可視的な経済的成果を導出せんとする北朝鮮当局の思惑であり、その方途とされたのは、経済システム（軍需産業優先の方針と計画経済）を変更することなく一計画経済がいかに実行されているかに関してはさしあたり措く—その効率化を図ること、わけても科学技術を一種の「潤滑油」として用いるとの方法論であった。さらに、軍需産業由来の科学技術の民生部門への伝播という^{ナラティブ}語り^{ナラティブ}が横糸としてそこに織り込まれ、あわせて「現代（的）科学技術に基づく自力更生」によってそれらが促進されるとの構図が、言説上に展開されていたのである。特に「自力更生」の概念を変容させ、外国製品の採用・導入をいわば「公認」するなど、北朝鮮の文脈に照らせば相当に思い切った試みがなされた点からは（むろん、そこには外国製品の氾濫という現実を糊塗することがもはや困難になったとの事情も介在していたものと考えられるが）、そこから必然的に生じる各種ロジック間の整合性の問題を二の次にしてでも実質的な経済的成果を獲得しようとする当局の政策的意図が明確に看取される。斯様な政権当局の志向性のありようが、北朝鮮経済政策の一つの特徴を形成していたのである。

しかしながら、この過程ではいまひとつの特徴、すなわちそれと表裏一体をなす北朝鮮経済の内実もまた、明確な像をもって浮上していた。外国製品の入手さえ独自に行えば、それがあたかも「自力更生」であるかのごとく解釈される「現代（的）科学技術に基づく自力更生」の実態、

それに基づいて「実現」される「われわれの力、われわれの技術」による CNC 化の実態、そしてより根源的な問題である思考の硬直性、勤労意欲の欠如、制度的不備、エネルギー不足という実態、さらにはそこから導かれるミクロレベルでの内実など、多くが「模範的行動」として描かれる事象からは、逆に北朝鮮が内包する構造的な問題点が表出していたのである。あるいは、このようなミクロレベルにまで固着した問題点の根絶が困難であることを認識しているからこそ、当局はそれらへの対応で必然的に伴う経済システム・経済構造の改編ではなく、「潤滑油」としての科学技術を通じた効率化によって生産の増大を図る方法論に立ち至ったとも考えられよう。ともあれ、かくのごとき理念と内実、そしてそれらの整合性を弥縫する試みが混淆したものが、畢竟『労働新聞』の言説なのであった。

それでは、以上の検討からいかなる知見が得られるのか。ここでは二点を指摘し、雑駁ながら結論に代えたい。

まず挙げるべきは、ここに示した「科学技術の普及による経済システムの効率化」という方法論が、逆に経済システムのさらなる「粗放化」をもたらす可能性をも内包している点であろう。特に外国製品の導入・利用に対して踏み込んだ姿勢がとられつつも、それが全面的な自由化に至らず、あくまで従来の「自力更生」概念の枠内で語られていることは、単に弥縫策としての側面のみならず、その過程で否応なしに招来される各単位の自律的—すなわち統制外の一行動の拡大に対し当局がなお強い懸念を有していることを反映したものと考えられ、この点は「現代（的）科学技術に基づく自力更生」概念自体が曲折を経てきたことから示唆される。すなわち、目的（統制を強化しつつ経済浮揚を図ること）と手段（自律化を一定以上許容する手法）の相克が、そこに現出していたのである。さらに付言すれば、当局の斯様な逡巡と方針転換（乃至は当局がその可能性を完全に排除しないこと）が、様々な面で一本稿に見たごとく一疑問の残るその科学技術重視政策の実効性を、さらに弱化せしめることも予想されよう。まさにこの点から、今後は（相対的に統制が容易な）自国の軍需産業部門からの技術伝播が各部門に均霑し、輸入品・外国製品を駆逐するとの構図が描かれていくであろうことが推測されるが、その実態を含め、さらなる考察が必要となろう⁴⁸。

そして、第二に留意すべきが、斯様な北朝鮮経済の様態が、相当程度「先軍時代の経済建設路線」の存在自体によってもたらされているであろう点ということになる。いかにその経済的効用（なにかんずく科学技術分野における波及効果）を強調しようと、軍事部門に資源の大半が吸収される構造がここまでに見てきた問題点の多くに直接的に作用している可能性はきわめて高く、特に「電力さえ潤沢に供給されれば生産が直ちに正常化する」との認識の下に展開される増産運動の効果は、低い効率性や労働者の熱意の欠如以上に、いわば自らの存在基盤そのものによって

「浸食」されていることが推測される。この点をふまえるならば、今後文献上において「先軍時代の経済建設路線」の位置付けがいかなる推移を示すかは、上に示した諸点の動きと同様（あるいはそれ以上）に、北朝鮮経済を読み解く上で重要な「切り口」となろう。

北朝鮮が自らの体制にとっての画期に措定する2012年を迎えるにあたっては、幾多の経済的成果が発表・誇示されるものと予想されるが、その背後に沈潜するこれらマクロ・ミクロ・メゾの各領域における北朝鮮経済の様態がいかに変化し、また継続するのか、いかなるロジックがそこに展開されるのかという視点から、引き続き注視することとしたい。

—注—

- ¹ 「すべてのものを人民生活向上のために！—全国の勤労者たちへ送る手紙—」『労働新聞』2010年1月10日付。
- ² 「金鉄消息 価値ある技術革新案を積極的に導入」『労働新聞』2010年12月6日付など。この「金鉄消息」の囲み記事は年間を通じて掲載されている。
- ³ 「朝鮮労働党中央委員会、朝鮮労働党中央軍事委員会の共同口号」『労働新聞』2010年2月6日付。
- ⁴ 「朝鮮人民軍最高司令部報道」『労働新聞』2010年3月9日付。
- ⁵ 「総攻勢の炎高く、経済強国建設に誇らしい成果を成し遂げた意義深き一年」『労働新聞』2010年12月9日付。工業部門の成果を紹介する特集記事である。
- ⁶ 例えば「社説 労働党時代の不滅の奇跡、朝鮮は決心すればやる」『労働新聞』2010年7月19日付。平安北道の大溪島干拓地の完工に関する記事である。
- ⁷ 例えば「偉大な指導者金正日同志におかれては平安北道内の工場、企業所を現地指導された」『労働新聞』2009年11月25日付。金正日への説明に用いられた展示資料の中で、設備の現代化に投資した額が外貨（ドル）で示されていることが確認できる。
- ⁸ 例えば「偉大な指導者金正日同志におかれては熙川市内の工場、企業所を現地指導された」『労働新聞』2002年7月27日付。金正日が「変化した環境」に合わせて「経済管理を革命的に改善させること」を強調したとある。
- ⁹ なお、2010年中に報道がなされた経済的成果の一覧は本報告書別稿（政治・社会編）に掲載されている。
- ¹⁰ 「先行部門で革新の炎をさらに高からしめよう」『労働新聞』2010年11月15日付。
- ¹¹ 「随筆 降仙の雷鳴」『労働新聞』2009年1月9日付。「降仙」はモデル単位の一つである平安南道千里馬郡の千里馬製鋼連合企業所を指す。なお、北朝鮮においては、建築工事の際に行われる発破・爆破の規模を示す単位として「マンサン（만산）」が用いられる。これは「万㎡」の意に訳される例が多いが、ここでは『朝鮮新報』の解釈に倣い、「万トン」とした（「大安親善ガラス工場建設で30万トン発破」『朝鮮新報』インターネット版2004年7月30日付<<http://www1.korea-np.co.jp/sinboj/j-2004/04/0404j0730-00003.htm>>2011年3月1日アクセス。同じ作業は『労働新聞』2004年7月23日付記事では「大安親善ガラス工場建設場で30マンサン大発破が進行」と記述されている）。
- ¹² 「政論 軽工業戦線、さらに氣勢よく前へ！」『労働新聞』2010年12月4日付。
- ¹³ 「勝利の二つの戦線」『労働新聞』2010年1月19日付。
- ¹⁴ 筆者は「先軍時代の経済建設路線」の論理展開とその内実について、すでに別項で考察を行っているため、ここではその詳細に立ち入ることはせず、それが実体経済に及ぼす影響に焦点を当てている（飯村友紀「北朝鮮経済政策攷—『先軍時代の経済建設路線』の含意」『東亜』第526号、2011年4月）。

- ¹⁵ 例えば「偉大な領導者金正日同志におかれては朝鮮人民軍第 522 軍部隊傘下の大同江ウナギ工場を現地指導された」『労働新聞』2010 年 12 月 16 日付。2002 年に建設されたという同単位が「味がよく栄養価も高いウナギを大量に飼育し、平壤市民たちに供給」しているとの記述が見られる。
- ¹⁶ 「社説 もう一度最先端を突破し、さらに高く飛躍しよう」『労働新聞』2010 年 3 月 25 日付。
- ¹⁷ 「社説 党代表者会精神を戴いて強盛大国建設で新たな革命的昂揚を起そう」『労働新聞』2010 年 11 月 1 日付。
- ¹⁸ 「経済強国建設の転換をもたらす偉大な長征」『労働新聞』2010 年 11 月 12 日付。
- ¹⁹ 「社会主義経済管理において掴んでいくべき高貴な指針」『労働新聞』2010 年 4 月 5 日付。
- ²⁰ 「党の軽工業革命方針貫徹と人民生活向上」『労働新聞』2010 年 7 月 15 日付。
- ²¹ 「先端科学技術の発展は経済強国建設の推進力」『労働新聞』2010 年 3 月 24 日付。
- ²² 「先端突破の熱風」『労働新聞』2010 年 2 月 17 日付。
- ²³ 例えば「第 11 次全国発明および新技術展覧会が開幕」（『労働新聞』2010 年 8 月 17 日付）。「蓮河機械」工作機械のブースが写真より確認可能であり、またそこには『蓮河 500 型 CNC 装置』なる機械が出品されたという（「最先端突破の熱風がもたらした貴重な結実」同 2010 年 8 月 21 日付）。なお、金正日の現地指導を報じた記事上では、前年 11 月より「蓮河機械」製工作機械が登場している（「偉大な領導者金正日同志におかれては改建現代化された平安北道内の工場、企業所を現地指導された」『労働新聞』2009 年 11 月 1 日付）。
- ²⁴ 「最先端突破戦の旗手たちは大高潮時代創造の英雄たちである」『労働新聞』2010 年 11 月 29 日付。
- ²⁵ 「世界的な関心—CNC 技術」『労働新聞』2009 年 8 月 23 日付。例えば、2006 年に発行され、政治・経済・外交における代表的な成果を列挙した『わが党の先軍政治（増補版）』（朝鮮労働党出版社）が CNC にまったく言及していない点などがその傍証となろう。
- ²⁶ 「科学技術と生産を密着させるための重要要求」『労働新聞』2010 年 4 月 29 日付。また、工作機械の国産化の実態も、同時に慎重に検討する必要があるだろう。
- ²⁷ 「先端科学技術の発展は経済強国建設の推進力」『労働新聞』2010 年 3 月 24 日付。
- ²⁸ 金ギボ「現代的科学技術に基づく自力更生」『千里馬』2010 年第 9 号、2010 年 9 月、58 頁。斯様な思考の傾向自体は数年前より表面化しており、例えば 2005 年発行の経済論文にはその嚆矢ともいべき記述が見られる（吉チュンホ「生産と建設における現代的科学技術に基づく自力更生の原則の具現」『経済研究』2005 年第 2 号、2005 年 5 月、14 頁）。なお、その呼称には「現代的～」と「現代～」が並存しているため、本稿では便宜上「現代（的）～」と表記している。
- ²⁹ 金フンイル「現時期ヨーロッパ市場に積極進出することは対外貿易発展の重要な要求」『金日成総合大学学報（哲学・経済学）』第 56 巻第 4 号、2010 年 10 月、122～123 頁。
- ³⁰ 例えば「社説 強盛大国建設で成し遂げられたもうひとつの偉大な勝利、全国の大慶事」『労働新聞』2010 年 2 月 11 日付。ここでは 2.8 ビナロン連合企業所での国内原料を用いた人造繊維の生産を報じているが、それを「現代的科学技術に基づく自力更生」の典型として称揚しつつも、外国の技術には一切言及していない。さらにこの出来事を取り上げた別の記事では「連合企業所のイルクンたちは主体工業の模範工場の CNC 化を他人に依存してではなく、われわれの力と技術によって実現しなければならないという確固たる観点に立ち、技術者との事業を力強く推し進めた」と、明確にこの点を否定している（「CNC 化が実現した楽しい仕事場」『労働新聞』2010 年 2 月 13 日付）。
- ³¹ 例えば「現代科学技術に基づく自力更生に飛躍の鍵がある」『労働新聞』2008 年 4 月 23 日付。ここでは「今日、科学技術を離れた自力更生はありえない」との認識が示されつつも「経済強国建設の要求に合わせて経済管理と経営活動を科学的・合理的に行っていこうとするならば、すべての経済部門のイルクンたちが現代科学技術を熱心に学び、それに依拠して事業を展開していく気風を徹底して立てることが重要である。現代科学技術の発展趨勢とその内容をよく知るとき、はるか先を見据えつつウリ式の科学的な企業戦略・経営戦略を立てることができる」とされ、他国の技術を積極的に導入すべしとの姿勢が後退していることがわかる。
- ³² 「飛躍をもたらした現代化の成果」『労働新聞』2010 年 12 月 14 日付。記者との座談会における軽工業省副相および食料日用工業省副相の発言である。
- ³³ 「偉大な首領金正日同志におかれては立派に技術改建された平壤穀産工場を現地指導なさった」『労働新聞』

2010年8月26日付。食品包装機械として中国・南洋食品機械電有限公司製「DZB-898C」が用いられていることが確認可能。

- ³⁴ 「偉大な領導者金正日同志におかれてはCNC化を実現した冠帽峰機械工場を現地指導された」『労働新聞』2010年5月21日付。金正日が外国製CNC工作機械の立ち並ぶ機械工場を視察しつつ、同単位が「CNC化を高い水準で実現した」ことを「高く評価」する事例であり、国産品とされる「蓮河機械」製「RT-150」とともに中国・瀋陽機床製「HTC-16」、台湾・麗偉電腦機械（leadwell）製「V-30i」の存在が確認できる。なお、同種の記事においては「自力更生」の語が用いられる例、登場しない例が混在しており、ロジックとしての「自力更生」との整合性になお課題を残していることが、推測される。
- ³⁵ 「党代表者をいっそう高い労力的成果で迎えるための大高潮の炎が力強く燃え上がる一楽元機械連合企業所で一」『労働新聞』2010年7月22日付写真。金正日が同企業所を現地指導した際の掲載写真（2010年6月19日付）と比較すると、写真に修正加工が施され、外国製工作機械の商標・型番表示が削除されていることが確認できる。
- ³⁶ 「政論 勝利者たち」『労働新聞』2010年6月10日付。
- ³⁷ 「大飛躍の鍵はイルクンたちが握っている」『労働新聞』2010年11月19日付。
- ³⁸ 「偉大な領導者金正日同志におかれては現代化の模範鉱山である3月5日青年鉱山を現地指導された」『労働新聞』2010年9月12日付。
- ³⁹ 「明日の勝利のための元肥となって」『労働新聞』2010年11月14日付。体育学校が「自体の力」で数十㎡分の木材を確保し、体育館の床面を張り替え工事を行ったとの事例である。また「常に隊伍の先頭で」（同2010年11月15日付）では平安北道朔州郡・朔州食料工場で独力で数十町歩の塩田を開発したことが報じられている。朔州郡は海に面しておらず、このことから、記事中で「西海のほとり」に造成したとされる塩田が行政区域外にあることが看取可能である。
- ⁴⁰ 例えば「愛の措置」『労働新聞』2009年1月10日付。ここでは2005年5月の出来事として、発電所建設に必要な資材を確保するため、金正日により「道内の一部の鉱山」の管理運営権を道に委譲する措置がとられたことが述べられている。
- ⁴¹ 指標別計画と生産額計画が個別に、かつ恣意的に記述される例を列挙すれば以下の通りである。
- ・「各種形態のメリヤス生産を伸ばす」（『労働新聞』2010年3月28日付。平壤市・船橋メリヤス工場で指標別に四半期計画を遂行）
 - ・「上半期計画を輝かしく遂行」（『労働新聞』2010年6月1日付。咸鏡北道・清津鋼材工場で指標別に上半期計画を遂行）
 - ・「指標別製品生産が拡大」（『労働新聞』2010年7月13日付。「各地の軽工業工場」で基本生産指標のうち、一般服・セーター・靴の生産が昨年同期比でそれぞれ112%・140%・165%という。また食料日用工業省の傘下の工場では上半期工業総生産額が昨年同期比1.3倍となったとされる）
 - ・「総攻撃戦の気勢高く成し遂げた誇らしい成果」（『労働新聞』2010年8月16日付。平安北道・楽元機械連合企業所で年間工業生産額計画を7月末までに前倒し達成したという）
 - ・「総攻撃線の炎を強く燃え上がらせて」（『労働新聞』2010年9月15日付。電気機械工業管理局で年間工業生産額計画と各種電線・変圧器などの重要指標計画が8月末までに達成されたという）
 - ・「精神力が爆発するとき、やり遂げられないことはない」（『労働新聞』2010年9月27日付。平安南道・大安重機械連合企業所で8月末までに年間工業生産額計画を達成という）
 - ・「年間生産計画を遂行した気勢で前進」（『労働新聞』2010年10月4日付。機械工業省傘下の工場・企業所での事例。「年間工業生産額計画を繰り上げ遂行した電気機械工業管理局の下の工場を対象設備生産闘争がいっそう活気を帯びて繰り広げられている」との記述があり、続いて「平壤326電線工場・大同江電機工場・鏡城碍子工場・安州絶縁物工場」で「年間主要現物指標計画を遂行した」と記されている）
 - ・「朝鮮中央通信社報道 10月の大祝典を輝かせる全人民的総攻勢の誇らしい成果」（『労働新聞』2010年10月13日付。「軽工業省で前年同期比で指標別生産が1.2倍に増加」「平壤市被服工業管理局で年間工業生産額が100.6%、朝鮮服生産は167.5%、ワンピースの生産は190.9%、子供服の生産は100%で締めくくった」

- 「平壤穀産工場、キョンリョン愛国サイダー工場、大同江食料工場、平壤子供食料品工場など多くの単位で醬油類・糖菓類・油・サイダー等の全般的指標の生産を昨年同期に比べて増加させた」との記述が見られる)
- ・「対象設備生産成果が拡大」(『労働新聞』2010年11月10日付。平安南道・安州ポンプ工場で年間のポンプ生産計画を指標別に完遂したという)
 - ・「年間計画を前倒して遂行」(『労働新聞』2010年12月29日付。平安南道・ウォンリ炭鉱で12月20日までに年間人民経済計画を指標別に遂行し、10年連続で計画を達成しているという)
 - ・「年間計画を輝かしく遂行」(『労働新聞』2010年11月10日付。平安南道・北倉地区炭鉱連合企業所豊谷炭鉱で年間計画を指標別に超過遂行したという)
- ⁴² 「人民に対する誠実な服務観点を植えつけて」『労働新聞』2010年12月18日付。平壤・万景台被服工場の事例。生産計画とニーズ(実際の需要)との乖離を示す事例といえよう。
- ⁴³ 「中心の環を見つけ出して掴み、頑強に推し進めて」『労働新聞』2010年11月3日付。平安北道・博川郡のイルクンたちの事例。ごく基本的な事項が「革新的」なアイデアとして描かれる状況からは、労働意欲(ここでは農作業に対する)が依然として低調なことが推測されよう。
- ⁴⁴ 「社説 人民消費品の質をより高めよう」『労働新聞』2010年10月21日付。文献によれば1997年には品質管理・監督に関する法律が制定されていたという(「朝鮮民主主義人民共和国品質監督法」『朝鮮民主主義人民共和国法典(大衆用)』法律出版社、平壤、2004年、748~756頁)。ただし2009年8月に開催された「全国品質管理成果展示会」に対して、同種の展覧会が開催されたのはこのときが最初との記述が『朝鮮新報』によってなされていることから、それらの法規の実行の度合はある程度推測されよう(「全国品質管理成果展示会が開幕」『労働新聞』2009年8月13日付。また「品質管理に関する展示会が初開催」『朝鮮新報』インターネット版2009年8月21日付<<http://www.korea-np.co.jp/news/ViewArticle.aspx?ArticleID=38069>>2011年3月1日アクセス)。
- ⁴⁵ 「彼らのように代用燃料を積極的に利用しよう」『労働新聞』2010年8月16日付。黄海北道・黄州郡農機械作業所で2008年1月に起きた出来事とされる。
- ⁴⁶ 「自力更生手帳」『労働新聞』2010年12月6日付。採取機械工業指導局傘下清津地区資材供給所の事例。一種のトルカチによって流通が担われていることが看取される。
- ⁴⁷ 「高潔な風貌、熱い真情」『労働新聞』2009年1月15日付。南浦市後浦旅館の労働者が独自に家畜を飼育して人民軍に提供しているとの事例。
- ⁴⁸ ただし、自らの掲げた「社会主義計画経済」から乖離することが、逆に総体としての経済成長に帰結する可能性もまた、あるいは推測可能であろう。もっとも、その場合に現出するのは、さしずめかつて古田博司が中国に見出した「銭鬼の巷」のごときものとなろうか(古田博司「一朝鮮研究者が見た中国(上)(下)」『東亜』第327号・328号、1994年9月・10月)。